

オーダーメイド授業研究会から学ぶ —先輩の授業実践に憧れて—

渡部 均

安城市立桜井小学校

I はじめに

令和2年度、新型コロナウイルス感染症により、本校では外部から講師を招いて授業研究が行えなくなっていた。令和3年度の4月に本校の校長（鈴木佳樹）は「この先生から学びたいと思える人がいたら、外部から講師として招きます」と、学校全体に伝えた。学びたい気持ちさえあれば、自ら講師の要請をして授業研究が行える環境を作っていただけた。

迷わず、当時附属岡崎中学校に勤務されている野村和彦教諭に講師を依頼した。理由としては、以前に同じ中学校で働いていて、尊敬できる先輩であり、何度も授業のアドバイスをいただいていたからである。そのつながりもあり、令和3年度の附属岡崎中学校の社会科の研究協力者として立候補し、授業づくりを学ばせていただいた。

II 野村和彦教諭実践 中1社会科「甘いバナナに隠された真実」について

「問題を見いだす」「問題を解き明かす」「生活に広げる」の3つの段階を意識した单元構想がなされていた。

「問題を見いだす」段階では、子どもが、日本で最も消費量が多い果物はバナナであり、海外からの輸入により1年中手に入りやすいことや健康ブームからバナナを使用した食品が多くあることに気付けるようにしていた。また、バナナの輸入先や生産状況に目が向くように、輸入されるバナナのほとんどがフィリピンで生産されていること、日本の企業もプランテーションに出資していることに気付

くようにしていた。さらに、調べを進める中で、バナナ生産者が農薬の空中散布をしていることから、健康被害を受けている事実が浮き彫りになり、意見交換を重ねていくうちに「どうすれば安心安全なバナナづくりができるのだろうか」という問題が共有された。

「問題を解き明かす」段階では、様々な立場の考えに触れ、多角的に考えることができるように、企業、生産者、消費者への取材が行われた。企業は消費者が望む低価格なバナナを提供しなければならないことや、フィリピンではバナナ園でしか働けないことや、低価格なバナナではなくエシカルなバナナを購入したいということに個々で気付いた。その後、意見交流が行われ、生産者はバナナを生産することしか稼ぐ方法がなく、生産しなくなれば生活が苦しくなるとの考えから、企業が変わっていく必要があるという考えが広がった。そして、変わっていくのは消費者も同じであるという意見が出され、消費者として責任のある行動を考えた。

「生活に広げる」段階では、消費者としてできる行動を考えて実践している。ポスターの配付、ホームページ作成、寄付などが行われた。

とにかく子どもが問題解決に向けて、前のめりになって追究している姿が印象的であった。そして、そのような授業に憧れをもった。子どもたちの生き生きとした姿を表出できるような授業を構想し、実践したいと考えた。

Ⅲ 小4社会科「残したいもの・伝えたいもの」の実践

1 オーダーメイド授業研究会の事前指導

事前指導の中で、「社会的な事象を自分事としてとらえる」「主体的に社会参画をめざす」ことの2点について主に指導を受けた。そして、以下のような指導計画を立てた。

- ①愛知県内にはどのような年中行事があるだろうか。(1時間)
- ②亀崎潮干祭を受け継いでいる人たちはどのような思いや願いがあるだろうか。(2時間)
- ③わたしたちの地域にある文化や年中行事には何があるだろうか。(1時間)
- ④桜井凧を受け継ぐ人はどのような思いや願いがあるだろうか。(3時間)
- ⑤わたしたちにできることは何だろうか。(3時間)

2 授業の実際

(1) 「社会的な事象を自分事としてとらえる」

①では、年中行事(亀崎潮干祭、豊橋祇園祭、国府宮はだか祭)を提示した。コロナ禍であったこともあり、祭りが中止されていることを伝え、「残念だ」「コロナだからしょうがないかも」とのつぶやきがあった。「祭りを行っている人は、どんなことを思っているのか」と問い返したときに、「祭りはやりたい」「みんなに来てほしい」とあった。その後、学習問題「どのような思いや願いがあって、続いてきたのか」を作り、学習計画を立てた。

②では、亀崎潮干祭の動画を見せ、昔の写真、資料や保存会の方の話を参考にして、調べたことを300年以上で「変わらないこと」、「変わったこと」にまとめた。

班で調べたことを持ち寄り、話し合う中で、「受け継ぐ人は変わっているね」「でも、ずっと受け継がれてきたことは変わっていない」と考えを広げている姿があった。また、「時間の経過で変わらないこと、変わったこと」の視点で、まとめたことにより、「祭りをこれからも守っていききたい、伝えていきたい」という保存会の方の思いや考えに気付く

ことができた。

③では、小学校のいろいろなところに飾られている桜井凧を提示し、目が向くようにした。学校内を調べることで、生活の中に、たくさんの桜井凧があることを実感していた。「桜井凧を受け継ぐ人はどのような思いをもっているのだろう」という問いに対して話し合う中で、「まず、桜井凧を作りたい」「桜井凧のことをもっと知りたい」などの児童の願いや思いがあることが分かった。

④では、まず実際に桜井凧作りを行った。当日は、保存会の方から、角凧の作り方、飛ばし方を教わった。次時には、桜井凧についての調べを行った。調べていく中で、桜井凧は約300年受け継がれていること、保存会の方は若い人でも65歳ぐらいであることが分かった。また、保存会の会長に話を聞けることになった。

保存会の会長から、「コロナ禍で活動がほとんどできていないこと」、「凧作りを教える人が高齢になっていること」、「約300年以上続く桜井凧が受け継がれなくなるかもしれないこと」を聞いた子どもたちは、「どうにかしなければ」と切実に感じ、亀崎潮干祭と同じように、桜井凧も受け継がれていかないかもしれないという危機感をもっていた。

(2) 「主体的に社会参画をめざす」

⑤では、保存会の会長の話を聞いて、意見交流を行った。「桜井凧が受け継がれていくために、わたしたちに何ができるだろうか」について真剣に考え、「ちらし作成、他学級に宣伝班」「動画を作成して、校内放送で流す班」「作り方を学んで広める班」の3つのグループに分かれ、主体的に行動する姿があった。

3 実践を終えて

問題解決的な学習を行ううえで、大切なことをご指導していただいた。2点にまとめると、①教材に出会い、子どもが抱いた「驚き」「疑問」「違和感」などが学習へ向かうエネルギー

ギーになるということ、そして、その抱えているエネルギーを言語化することが大切であること。②多面的、多角的な視点から、社会的な事象をとらえる学習にすることである。

IV おわりに

オーダーメイド授業研究会でご指導いただいたことが、今日の授業実践の礎となっている。問題解決的な学習に取り組んで、少しずつではあるが、目の前の問題を切実な問題としてとらえ、その問題を解決しようと仲間とともに動き出す子どもが増えている。さらなる授業改善に努め、よりよい社会をつくっていかうと考える子どもを増やしていきたい。